

ウィークリー・ブレット・オブ・ライフ

(2026年2月16日(月)～22日(日))

岸和田聖書教会
牧師 栗原純人

今週も民数記を読み進めます。「荒野の40年」の終わりの方です。

2月16日(月)

今日の聖書日課：民数記 22：2～20

バラムは彼らに言った。「今夜はここに泊まりなさい。主が私に告げられたとおりに、あなたがたに返答しましょう。」モアブの長たちはバラムのもとにとどまった。

民数記 22：8

22～24章は、占い師バラムとモアブの王バラクが中心人物。いやバラムの話と言ってもいい箇所です。私たちが聖書を読んでいて最初にびっくりするのがここ！異邦人、占い師(7)のバラム。この人がバラクの使い：ミディアン長老たちに「主が私に告げられるとおりに」と言ったこと。「ほんまか?!」と思います。どこでバラムは主を知ったのか? しかも「主が私に告げられるとおりに」という関係性。聖書はこれについて何も語っていません。

神さまはときに、私たちの想像をはるかに超えて、ご自身を人々に示されることがあるのです。たとえ人が用いられたとしても、そうでなかったとしても、人間が主を知るのは主ご自身のみわざなのです。

2月17日(火)

今日の聖書日課：民数記 22：21～41

バラムは主の使いに言った。「私は罪を犯していました。あなたが私をとどめようと道に立ちただかっておられたのを、私は知りませんでした。今、もし、あなたのお気に召さなければ、私は引き返します。」

民数記 22：34

バラムはどんな罪を犯していたのでしょうか? 彼は主のことばどおりに動いたのに。主はこう言われましたよね? 「この者たちがあなたを招きに来たのなら、立って彼らと一緒に行け。だが、あなたはただ、わたしがあなたに告げることだけを行え。」(20)。そのとおりにバラムはしただけです。しかし、これは主の「ひっかけ問題」でした。はじめに主はバラムに「あなたは彼らと一緒に行ってはならない」(12)と言われました。バラムは二回目のこのことばを聞いて「あれ? おかしいな?」と思わなかったのか? 思ったかもしれませんが、行きました。バラク王の報酬を求めたからです(17)。

神の前に生きる私たちは自分自身をだますことはできないのです。だましていても、主はそれを示されるのです。悔い改めましょう。

2月18日(水) 本日は祈祷会です

今日の聖書日課：民数記 23：1～30

バラムはバラクに答えた。「私は、主が告げられることはみな、しなければならない、とあなたに言ったではありませんか。」

民数記 23：26

バラクの報酬を求めて王のもとに行こうとしたバラムでしたが、主にその罪を示されました。しかし主は改めてバラムに「その人たちと一緒に行け。しかし、わたしがあなたに告げることばだけを告げよ。」と言われ、バラムはバラクの長たちといっしょに行きました(22：35)。23、24章は

バラク王のもとでバラムが語ったことが記されています。イスラエルをのろってほしいと願うバラクでしたが、バラムは言いました。「私はどうして呪いをかけられるだろうか。神が呪いをかけない者に。私はどうして責めることができるだろうか。主が責めない者を。」(8)。そしてイスラエルをのろうのではなく、祝福しました(11)。バラムを問い詰めるバラクですがバラムは答えます。「主が私の口に置かれること、それを忠実に語ってはいけないのですか。」(12)

それでもバラムにイスラエルをのろってほしいバラクは、二度目にバラムにお願いしたのですが、バラムはやはり呪いではなく祝福しました。するとバラクは言いました。「彼らに呪いをかけることも祝福することも、決してしないでください。」(25)。これに対してバラムが答えたのが冒頭の聖句。これぞ主の預言者！ん？預言者なのかなあ？でも、バラムは真実に見えます。

2月19日(木)

今日の聖書日課：民数記 24：1～25

バラムは立って自分のところへ帰って行った。バラクも帰途についた。

民数記 24：25

二度も裏切られたバラク王。しかし諦めきれません。バラクはもう一度バラムにイスラエルをのろうようお願いしました。バラムは「イスラエルを祝福することが主の目にかなうのを見て、これまでのようにまじないを求めに行くことをせず、その顔を荒野に向けた。」(1)。そしてイスラエルに対する三度目の祝福のことばを述べました。バラクはあきれて、もう報酬はやらん！と言い放ちました(10～11)。しかしバラムのイスラエルへの祝福は止まりません(15～19)。この中にはメシア預言までもありました(17)。

ところが、というか、仕方がなかったのか、冒頭の聖句。バラムは自分の国に、占い師として自分が育った国に帰って行ったのです。

2月20日(金)

今日の聖書日課：民数記 25：1～18

祭司アロンの子エルアザルの子ピネハスは、イスラエルの子らに対するわたしの憤りを押しとどめた。彼がイスラエルの子らのただ中で、わたしのねたみを自分のねたみとしたからである。それでわたしは、わたしのねたみによって、イスラエルの子らを絶ち滅ぼすことはしなかった。

民数記 25：11

イスラエルの民はシティムでモアブの娘たちと淫らなことをし始め、彼女たちの神々を拝みました。主の怒りが燃え上がります(3)。そのとき、祭司アロンの子エルアザルの子ピネハスは、主のことばに従い、イスラエル人の男とミディアン人の女のカップルを見るやいなやこの二人の腹を刺して殺しました。すると主の罰が止まりました。そのときすでに2万4千人が死んでいたのです(6～9)。このことに対する主のことばが冒頭の聖句。主はねたむ方。愛する者が違う方を向いていることを許すことができないのです。ピネハスは主のねたみを自分のねたみとしました。

2月21日(土)

今日の聖書日課：民数記 26：1～56

以上が、イスラエルの子らの登録された者で、60万1730人であった。

民数記 26：51

26章は。この書物が「民数記」と言われるゆえん。二回目の人口登録。40年前に生きていた20歳以上の兵士はみな死んでしまいました(64)。しかし、12部族の総計は、前回と同じ約60万人(1：46)。大きな主の御手の中にイスラエルは生かされ続けて来たのです。

2月22日(日) 歓迎礼拝

本日の礼拝説教箇所：マタイ 4：1～11 「人はパンだけで生きるのではなく…」

和歌山聖書教会の辻喜男牧師がみことばを語ってくださいます。期待して礼拝しましょう。

この日、栗原牧師は岸和田の早朝礼拝、和歌山の礼拝で説教します。お祈りください。